

日本簿記学会ニュース

No. 65:7/2018

《部会の経過報告》

第34回関西西部会は、平成30年5月19日(土)に甲南大学(準備委員長:池田公司氏)にて開催されました。また、第34回関東部会は、平成30年6月30日(土)に駒澤大学(準備委員長:石川純治氏)にて開催されました。詳しい内容は本誌部会記をご覧ください。

《全国大会のご案内》

第34回全国大会を下記の予定で開催いたします。

厳しい暑さが予想されますので、軽装にてご参加頂きますよう、お願い申し上げます。

2018年8月23日(木)～8月25日(土)

会場:西南学院大学

【2018年8月23日(木)】

学会賞審査委員会 13:00～15:00

理事会 15:00～18:00

【2018年8月24日(金)】

参加者受付 11:30～(2号館7階)

高校簿記教育懇談会 10:00～11:30

(2号館8階大会議室)

司会:加瀬きよ子(芝商業高等学校)

基調報告:工藤栄一郎氏(西南学院大学)

「簿記会計基礎教育の社会普及と高大連携」

会員総会 12:45～13:45(2号館8階大会議室)

統一論題報告 14:00～16:00

(2号館8階大会議室)

論題「複式簿記における記録の信頼性」

①座長解題(14:00～14:15)

座長:松本敏史(早稲田大学)

②報告(14:15～14:50)

渡邊泉(大阪経済大学)

「会計の役割と記録の信頼性

—歴史からのメッセージ—

③報告(14:50～15:25)

高橋聡(西南学院大学)

「現行会計制度における

複式簿記の意味と記録」

④報告(15:25～16:00)

福川裕徳(一橋大学)

「記録の信頼性に対する新技術の影響」

研究部会報告 16:10～17:35

司会:戸田龍介(神奈川大学)

報告①:簿記理論研究部会

部会長:上野清貴(中央大学)

「簿記における計算構造の総合的研究」

報告②:簿記教育研究部会

部会長:加瀬きよ子(芝商業高等学校)

「高大連携の視点から考える簿記教育」

報告③:簿記実務研究部会

部会長:梅原秀継(明治大学)

「収益会計の現状と課題」

懇親会 18:00～19:30

【2018年8月25日(土)】

参加者受付 9:00～(2号館7階)

自由論題報告 9:30～11:25(2号館4階)

報告①:9:30～10:05 / 報告②:10:10～10:45

/ 報告③:10:50～11:25

統一論題討論 11:45～13:30

(2号館8階大会議室)

座長:松本敏史

報告者:渡邊泉, 高橋聡, 福川裕徳

詳しくは全国大会プログラムをご覧ください。

日本簿記学会第 34 回関西部会記

甲南大学
準備委員長 池田 公 司

2018年5月19日(土)、神戸市の甲南大学岡本キャンパスにおきまして、日本簿記学会第34回関西部会を開催させて頂きました。

第34回関西部会では、自由論題の形式ではなく、統一論題の形式をとらせて頂きました。統一論題のテーマは、「会計ビッグデータがもたらす簿記・会計の未来」とさせて頂きました。日本簿記学会の33年間の歴史において、このテーマを取り上げるのは、今回が初めてになります。

神戸大学大学院経営学研究科の清水泰洋教授に座長をお願いいたしましたところ、ご快諾を賜り、準備委員長宛にご送付頂きました「統一論題趣意書」において、次のように述べられています。

「近年のAIの深化は、会計にも変化を及ぼそうとしている。しかしその変化は技術的側面に限らず、会計のあり方を大きく変革する可能性を秘めている。AIは会計人から職を奪うのか。もしそれが正しいのであれば、会計のどのような職能が機械に代替されるのか。現在の会計の現場においてAIは、いかに活用されているのか。これらは簿記・会計に携わるすべての人間が理解しておくべき事項となりつつある。そこで本統一論題においては、ビッグデータ、AIに関する専門家に登壇いただき、会計人が理解すべき基礎知識を踏まえ、簿記・会計の未来について論じることとしたい。」

座長の清水泰洋氏(神戸大学)のもと、報告者として、中溝晃介氏(松山大学)、山口峰男氏(PwCあらた有限責任監査法人シニアマネジャー、PwCあらた基礎研究所・所長、公認会計士)、岡本浩一郎氏(弥生株式会社、代表取締役社長)の3名をお迎え致しました。この度の統一論題のテーマに、研究者、職業会計人、及び経営者の三つの異なる立場からご報告をお願い致しました。

第34回関西部会の当日、当初の予想を超え、約70名の会員の皆様にご出席され、関東部会(東京都や山形県)からもご出席頂きました。このことから、AIとビッグデータに対する本学会の会員の皆様

の潜在的な関心の高さが分かりました。

中溝晃介氏は、「ビッグデータが簿記・会計にもたらす影響」という論題を掲げられ、会計ビッグデータを構築する場合、求められるデータの形式はどのようなものかという問題意識の下で、会計ビッグデータのデータ形式としてはXBRL GLが適していることを明らかにされました。そして、XBRL GLが普及することで、どのような貢献が得られるのかにつき具体的で明確なご説明をされました。

山口峰男氏は、『AI×データ時代』を生きる会計人」という論題を掲げられ、①会計ビッグデータとは一体何なのか、②なぜこのテーマに取り組みなければならないのか、③会計ビッグデータが人工知能と結びつくと会計の世界で何が起これるか、及び④会計ビッグデータは職業会計人に現実にはどのような影響を及ぼし始めているのか、という四つの観点から、同氏の長年にわたる豊富な実務経験に基づき説得力のある分かりやすい説明をされました。

岡本浩一郎氏は、「ビッグデータとAIがもたらす簿記・会計の可能性」という論題を掲げられ、そもそも簿記・会計の本質的な価値とは何なのかという問いを最初に提示されました。簿記・会計の本質的価値は、「自分の事業が今どのような状況にあるかを正確かつタイムリーに把握すること」であり、事業の健全な運営と発展を実現することが重要であると指摘されました。しかしながら、会計実務に精通されている同氏によると、実際には、繁雑な事務処理に忙殺されこの本質的な価値が発揮されていない現実があります。ビッグデータとAIを積極的に活用することで、この「理想と現実のギャップ」を埋めるとともに、会計データの高付加価値化を実現することも出来るようになります。同氏は、現状ではまだまだ課題があるとしても、「一步踏み出すことが重要である」という貴重な認識を示されました。

以上のようなご報告を受け、統一論題討論におきましても活発な議論が展開されました。第34回関西部会のチャレンジングな取り組みを通して、わが国における「簿記」の位置づけとその意義について、歴史、理論、教育、及び実務の側面から活発な討論が展開され、本学会の発展にささやかな貢献ができたと考えております。

日本簿記学会第34回関東部会記

駒澤大学 石川純治
準備委員長

日本簿記学会第34回関東部会は、平成30年6月30日(土)、駒澤大学で開催された。今回は、記念講演と自由論題報告に加え、昨年1月に逝去された井尻雄士先生を偲んで特別企画が設けられた。

1 記念講演

笠井昭次氏(慶應義塾大学名誉教授)による記念講演は、「計算対象の論理の重要性—仕訳を手掛かりに」と題して行われた。その眼目は、会計実践(会計制度)と会計理論の双方において今日多くの混乱があり、その原因は計算対象の論理の軽視ないし無視に求められる、という点であった。講演では時間の制約で主として会計実践における2つの事例、すなわち投機目的有価証券(売買目的有価証券)と修繕費を取り上げて、その混乱と原因に関する氏固有の考え方が仕訳例を用いて論じられた。

印象深かったのは、講演の最後に研究のあり方についてポパーの反証主義哲学に触れられた点、また座右の銘とされる『倚りかからず』(茨木のり子著)の一節を読み上げられた点である。後者での「自分の耳目」、「自分の二本足」という点は、まさに今回の講演(氏の研究スタンス)そのものといえる。とかく「倚りかかる」ことの多い学会・学界という「世間」ではあるが、そこはまた違う世界を見せてくれる講演であった。

2 自由論題報告

今回の自由論題報告者は川崎定昭氏(公認会計士・税理士)のみであった。「会計基準の国際化に対応した複式簿記教育に関する一考察—複式簿記の倫理性」と題する報告では、現代の制度会計の特質、すなわち投資家本位の会計を主流とする現代の会計が複式簿記とどのように関連づけられるかという問題意識のもと、制度会計の現代的特質、現代の制度会計における複式簿記の位置づけ、複式簿記における倫理教育の必要性、会計基準の国際化に対応した簿記教育のあり方、という点について議論がなされた。特に複式簿記の倫理性という点が1つの重要な論点となり、実務家および研究者との活発な質疑応答の

なかでもその点が取り上げられた。

3 特別企画

陣内良昭氏(東京経済大学)は「井尻会計理論から受け継ぐもの」と題して、井尻会計理論、特に会計に対する見方と考え方を検討し、井尻理論から何をどのように受け継ぐべきかについての議論がなされた。まず、「インタビュー日本における会計学研究の発展」を通じて井尻会計理論の形成過程をインタビュー要旨として紹介され、それを踏まえて井尻会計理論の特徴を6点にわたって示された。

さらには、その6点につき井尻会計理論から受け継ぐべきものについての議論がなされた。特に、数学的厳密さに対する弁証法の思考方法(発展過程)、因果的複式簿記および分類複式簿記の検討課題、取得原価主義と複式簿記との結びつき、会計責任の概念、などについて氏の見解が示された。

石川純治(駒澤大学)からは、まず準備委員長の立場ながらこの企画の一人として加わった趣旨と経緯の説明があり、会員の了解を求めた。特に、講演のなかで井尻先生の生前の生講義の映像(放送大学ゲスト出演)が映し出されたが、参加者はこの映像をどうして井尻先生の考え方やお人柄の一端をあらためて垣間見る思いがしたに違いない。その点でも、井尻先生を偲ぶという趣旨にそった目玉の企画であったといえる。

石川自身は「3式簿記への招待」と題して、論理的相対化の意味(現実にはないものを考える)、複式から3式への展開と単式から複式への展開との同型性、簿記システム化(ビルトイン)の意義、言語としての簿記(会計責任と複式簿記の無言の力)、2つのRの区別(記録と報告・開示)、などの観点から3式簿記展開に対する見解を示した。

なお、今回の企画では質疑応答を設けるだけの時間的余裕はなかったが、当初はシンポジウム形式による企画案も考えられた。参加者も含めてディスカッションできれば、井尻先生を偲ぶという趣旨により沿ったものとなったかもしれない。

以上、今回の関東部会は通例にはない特別企画を設定したが、参加者からは好評の感想もいただき開催校として有り難く思っている。梅雨明けの猛暑のなか、懇親会も含め、多数ご参加いただいた会員の方々に厚くお礼申し上げる次第である。

歴史の史料としての会計記録

国士館大学 中野常男

複式簿記の成立に結びつく組織的な会計記録は、金銭の貸借取引や商品の信用取引に伴う債権・債務の記録から誕生したと言われる。そして、このような債権・債務の発生、特に金銭の貸借があれば、今日でも過去でも、その対価としての利息（利子）の受払いは当然のことと考えられる。しかし、宗教的な見地から利息の受払いが禁止されたことがある。最も有名な事例は、13世紀前半に、有能な法学者でもあったグレゴリウス九世（在位：1227～1241）が公布した「徴利禁止令」であろう。もっとも、「徴利禁止令」が公布されたからといって、現実には「徴利」が停止されたことはなく、「徴利の禁止」という原則（建前）を維持しながら、ある種の仮構を設けて利息の受払いが実質的に行われていた。

では、当時の商人たちは、どのような仮構を設けて利息の受払いを会計処理していたのであろうか。先人の研究に拠るならば、「神の御名にてアーメン」などといった宗教的な文言が随所に見出される当時の会計帳簿では、「徴利」（usura）に結びつくような「利息」（interesse）という用語の使用は当然に回避され、代わりに、たとえば、「罰則金」（pena）という用語が用いられた。この「罰則金」という用語の背景には、利息を、金銭の貸付に対する報酬とは見ず、返済の遅延に起因する損害の補償とする仮構的解釈（「利子罰則説」）があったのである。たとえば、金銭を貸し付けて1か月後に元利金をまとめて回収するという取引を仮定すれば、契約で貸付日＝返済日と定めることにより、返済を受けるまでの1か月は延滞期間と見なされ、これに対する罰則金（実質

的には利息）を受け取るのである。

このような、実質は「利息」であるものを、仮構的に「罰則金」として記帳するというような脱法的手法は、形態を変えて、当時の官庁会計にも見出される。複式簿記起源論における中世イタリア起源説、その中にジェノヴァ起源説があるが、これを根拠づける重要な史料として、ジェノヴァ共和国の財務官（massaria communis）の元帳（1340）が挙げられる。この会計帳簿には、財務官や徴税官、行政経費などに関する諸勘定とともに、胡椒や生糸、塩などの売買を記帳した商品勘定（商品名商品勘定）が散見される。たとえば、「胡椒勘定」には、当時のレヴァント貿易における主要な輸入商品であった胡椒の売買が記録され、最終的に販売損失が計算されていた。そもそもジェノヴァ共和国の官庁会計を記録した会計帳簿に、なぜ商品売買取引を記録した商品勘定が現れるのか。また、そこで計算された商品の販売損失とはどのような意味を持つものであったのか。

結論から言えば、「胡椒勘定」は、通常の商品売買取引を反映したものでなく、ジェノヴァ共和国政庁が、財政資金調達のために、商品を高い価格で掛け買いし、安い価格で現金販売したことの記録であり、そこで計算されている販売損失は、買掛金を決済するまでの借入期間に対する支払利息に実質的に相当するもの、つまり、資金の借入れに対する利息支払額という性格を有していたのである。それは、当時の教会法による「徴利の禁止」という原則に対して、財政危機に対処すべくジェノヴァ共和国が行った仮構に基づく脱法的行為の記録であった。

上述のように、会計記録は、単なる取引の記録としてだけでなく、それらが作成された時代の社会経済的環境に照らし合わせて読み解くならば、過去に生きた人たちのさまざまな行為やその背後にある思考をわれわれに語ってくれるのである。

編集後記

前会長の中野常男先生に《ずいひつ》をご執筆いただきました。ぜひご一読ください。中野会長から引き継いだ佐藤会長の新体制となり、もうすぐ一年が経とうとしています。研究セミナーの開催、学会誌の改変、日本学術会議協力学術研究団体登録申請等、新たな挑戦が進行中です。学会ニュースや学会ホームページでも進行状況を随時お知らせしてまい

ります。（石光・小澤・中村・兵頭・和田・渡邊）

発行所
編集兼
発行人

日本簿記学会事務局

事務連絡所

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-1-15

株式会社白桃書房

e-mail boki@hakutou.co.jp

URL <http://www.hakutou.co.jp/boki/>